



写真「田んぼの生きものシリーズⅣ」  
メダカ

地域でのフィールド調査・研究の情報

## ぼくらは田んぼの合唱団 ー滋賀に住むカエルたちー

琵琶湖博物館の水族展示では、毎年テーマを決めて夏休みを中心に水族企画展示を開催しています。今年は、企画展示「ニゴローの大冒険～フナから見た田んぼの生きものにぎわい～」にあわせて、田んぼをテーマにできないかと考えてみました。水族企画展示は、本館の企画展示と異なり生きものを生きたまま展示することができます。ただ、主人公であるニゴローはニゴロブナで、すでに水族展示の水槽に泳いでいます。ニゴローのエサになるミジンコなどは小さすぎてなかなか展示になりません。そこで目を付けたのがカエルでした。田んぼに水が張られ、田植えが始まる頃になるとそこら中でカエルが鳴きはじめ、稲が育つにつれてますますにぎやかになります。しかし、近年は減反や田んぼの宅地化などで、以前に比べるとカエルの鳴き声を聞く機会は少なくなっていました。そこで、今年の水族企画展示では、「ぼくらは田んぼの合唱団ー滋賀に住むカエルたちー」と題し、滋賀県内に生息するカエルを紹介することにしました。

滋賀県内には現在16種類のカエルが生息していますが、必ずしもすべての種類が田んぼにすんでいるわけではありません。山の中を流れる溪流から、田んぼやため池、琵琶湖の沿岸までさまざまな水域にすんでおり、果てはあまり水に入らない種類までいます。また、雪の降りしきる時期に産卵するものや、木の枝や畦の土の中など水の外に卵を産むものなど、生態もさまざまです。おまけに近縁な種類では、ほとんど見分けのつかないものもいます。そこで、今回の展示ではそれぞれのカエルのすむ環境と近縁種の見分け方を中心に紹介しました。



滋賀にすむカエルたち全種類(ナガレタゴガエルは秋山廣光氏撮影)

たとえば、皆さんがよくご存知のニホンアマガエルは、シュレーゲルアオガエルと色も形もたいへんよく似ています。ただ、吻(鼻先)を横から見ると、ニホンアマガエルは丸いのに対し、シュレーゲルアオガエルはとがっているのが簡単に見分けることができます。また、美しい鳴き声で有名なカジカガエルは、イワナやアマゴの生息する溪流の石の上で、6・7月頃を中心に鳴いています。そのほかにも、トノサマガエルによく似たナゴヤダルマガエルは、生息環境の悪化や減少、それに伴って近縁のトノサマガエルとの間で交雑が進むことで、生息が危ぶまれており、滋賀県では「ふるさと滋賀の野生動植物種との共生に関する条例」の中で「指定希少野生動植物種」に指定され、保護されています。一方で、食用ガエルと呼ばれるウシガエルはアメリカ原産のカエルで、外貨獲得

の花形とするために、1900年代前半に輸入され全国に広がってゆきました。一次は、冷凍肉としてアメリカに大量に輸出されていたようですが、やがてそれも廃れてしまい、現在では各地の野外で大量に繁殖し、環境省により「特定外来生物」の一つに指定されてしまいました。

残念ながらこの水族企画展示は、9月2日で既に終了してしまいました。これを読んでいただいている皆さんの中には、見に来ていただいた方もおられるのではないかと思います。楽しんでいただけたでしょうか。秋になりカエルの季節も終わってしまいましたが、来年はぜひカエルの声を聞きに行ってみてください。ただし、カエルの合唱タイムは夜なので、開演時間には注意してくださいね。(総括学芸員 桑原雅之)

## どこでもだれでもフィールド情報 日々の暮らしもフィールドそのもの

家計簿をつけるのが苦手な私は、レシートをノートに張っておくことにしています。商品名、日付、時間、お店の名前・・・、色々な情報が載ったレシートが積み重なったこのノートを、もし数百年後の人が見つけたら。平成時代の庶民の暮らしを残した貴重な資料、なんてことにならないかなあ。時々、そんな遠い未来に思いを馳せます。普段の当たり前前の暮らしの中にこそ、この時代この場所を生きる面白さが隠されているものです。

私は、南アルプスの麓に位置する山梨県早川町の山村で調査をしています。山間の村で、「昔はここまで道路が開くなんて思わなかった。足でこの山を越えただよ。」そんな話を聞いては、今ここで

話をしている、その方が子供だった頃、今とは随分と違う暮らしがあったことに驚きます。白い米の飯は、特別の時でないとは食べられなかったこと。初めて魔法瓶を買ってもらって、お客さんが来るたびに慌ててカマドで湯を沸かさなくて済むようになったこと。

琵琶湖博物館には、昭和39年の彦根の農村、富江さん御一家の暮らしの展示があります。そこでも、この50年足らずの間に変わったことの多さを感じることができます。そんな暮らしの変化を引き起こしたり、巻き込まれたり、体感してきた主人公は、富江さんだけではなく、あなた自身であり、私自身でもあります。



周囲を山々に囲まれた村  
(山梨県早川町茂倉)



昭和39年の富江さんご一家の暮らしを再現した展示  
(琵琶湖博物館)

一人ひとりの経験や人生は、この時代にこの地域に生きたからこそ、暮らしのあり方や思いが詰まった貴重なもの。にもかかわらず、当たり前すぎるせいか、なかなか記録として残ることがありません。自分の暮らしや経験を、書き記してみたい。書き貯めてきた日記や作品を、まとめてみ

たい。そんな思いをお持ちの方がいらっしゃれば、お気軽にお声をおかけください。自分誌や生活誌といった形で、未来へのプレゼントを残してみませんか？

(学芸員 大久保実香)

どこでもだれでもフィールド情報

## ナラ枯れと滋賀県の森

まだ夏も盛りだというのに、森の木々が赤茶色く変色しているのを見かけたことはありませんか？それは紅葉ではありません。「ナラ枯れ」という現象によって枯れてしまった木々です。ナラ枯れの被害を受けているのは主にミズナラやコナラという木で、これらの木は昔から人々に利用されてきたので、森の中でかなりの割合を占めており、森林に与える影響は大きいと考えられます。

現在、至る所でナラ枯れ被害を確認することが出来ますが、被害はどの様に広がっていったのでしょうか。年ごとの被害の位置をデジタルデータに整理することで、見えてくるがありました。

最初に確認された被害は、県北部の余呉町や西浅井町の周辺でした。その後、高島市マキノ町にも拡大しますが、しばらくは小さな規模の被害が発生と終息を繰り返していました。

ところが2005年、事態は急変します。被害範囲が突然拡大し、琵琶湖の東側では彦根市や多賀町でも被害が確認され、西側では高島市全体に被害が及ぶようになりました。

この年を境にして、ナラ枯れ被害は県南部へ向かってどんどん拡大していくことになります。2009年には少し被害が収まったかに見えました

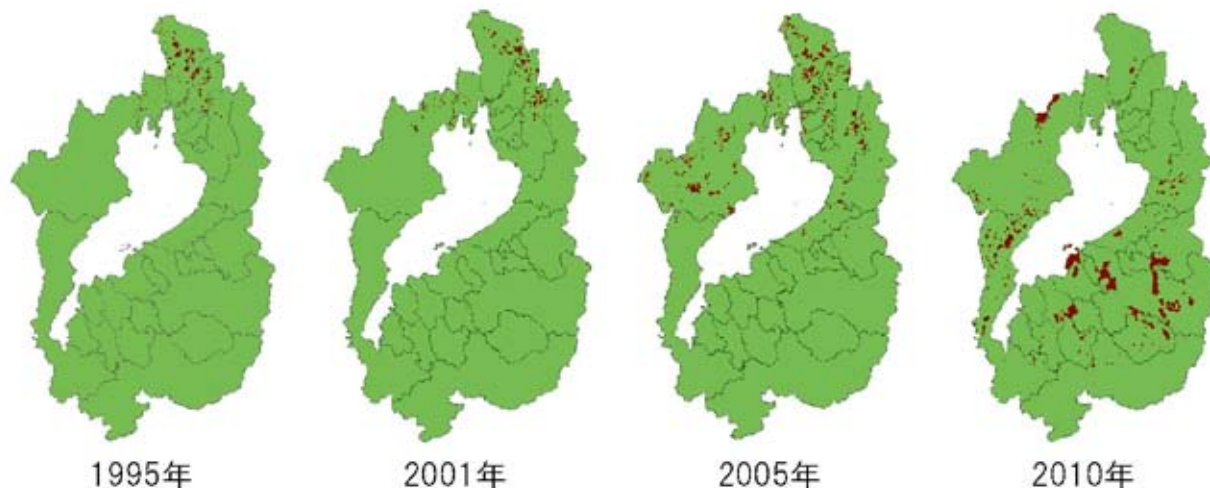


ナラ枯れで枯死し、変色した木々

が、翌年2010年には再び大きな増加があり、大津市の志賀方面や東近江市での被害急増が確認されました。そして現在、被害は県のほぼ全域で見られるようになり、その中心は甲賀市となっています。さらに、すでに被害が終息に向かっていた県北部で再びじわじわと被害地が確認されていることも不気味な兆候です。

ナラ枯れの被害は、滋賀県だけでなく全国で拡大していますが、どの様に拡大しているのかを調べた詳しい情報は少ないのが現状です。身近な山に目を向けてみてください。森に起きている変化に気づき、知ることが問題解決の第一歩です。

(滋賀県立大学 環境科学研究科 環境動態学専攻 修士2回 岸本 泰典)



ナラ枯れ被害の推移

# 標本の観察から イラスト作成へ

琵琶湖博物館の地下には、広大な収蔵庫空間が広がっていることをご存知でしょうか？ここにはさまざまな分野の貴重な資料が収蔵されていて、専門のスタッフが整理や管理に当たっています。僕はそのうち魚や貝の資料を担当しています。



「ニゴローの大冒険」のために作成したイラスト  
(原画：出口武洋)

もともと美術を学んでいたということもあり、展示パネルなどのデザインやイラストの仕事もさせていただくことがあります。美術系の人になぜ博物館で？と思われるかも知れませんが、研究も芸術も「知的探究を目指す」という点では同じです。標本をじっくり観察していると「この生物はなぜこんな形に進化したのだろうか？そもそも生命とは何だろう？」などと考え込んでしまいます。そんな観察の集大成のひとつが、企画展「ニゴローの大冒険」(2012/7/14～11/25 開催)のために描いた巨大なブルーギルです。制作に当たっては、写真や標本の観察はもちろん、獲物を捕らえる動きを見るために水族展示に足を運んだりしました。ブルーギルに襲われるニゴロー(ニゴロブナの稚魚)の視点がうまく伝わっているのでしょうか？



博物館の地下に広がる  
収蔵庫空間

(資料整理職員 出口武洋)



保存処理された鍬

## 【資料裏話 その6】 P E G ってご存知ですか？

PEGとは、正式にはポリエチレングリコール (polyethylene glycol) という高分子化合物のことで、実は似たものが化粧品のクリームにも使われています。考古学では、遺跡から発掘された木製品の保存処理に用います。出土したままでは乾燥してバラバラになってしまう木製品を、温めたPEGに浸け、農具などではおよそ1年の時間をかけて内部の水と置換します。その後常温に戻して木材組織を固めることで昔の木製品も、いつまでも発掘された時のままの状態に保っておけるわけです。木製品も人のお肌も、若さを保つためには時間と努力が必要なんですね。(嘱託職員 吉崎早苗)

### ● 編集後記 ●

秋の野に赤く彩りを添えているヒガンバナ。名前のおと秋のお彼岸に咲く花なのですが、今年は開花が遅く10月になって盛りになりました。温暖化の影響か、野の生きものの変調が感じられます。お彼岸にいただく「おはぎ」もあんもちと呼ぶようになるのかも。(てら)

### 鳥の目 魚の目 クイズ

「学名の由来は…」

メダカの学名は *Oryzias latipes* (オリジラスラティペス) といい、ラテン語で表記されています。さて、この *Oryzias* とはどういう意味でしょうか？

- ① 稲
- ② 目
- ③ 黒

答えは、紙面のどこかにあります。

### ◆ 巻頭写真の説明 ◆

田んぼではかつて「メダカ为学校」と呼ばれるほど、たくさんのメダカがいました。しかし、生息環境の悪化などにより、現在ではほとんどその姿を見ることができません。メダカのようにかつて身近にいた魚の多くが、今では絶滅の危機に瀕しています。